平成28年度　岡山県立西大寺高等学校　学校評価書

学校経営目標	コミュニケーション能力の育成を核とした学校づくり －グローバル化する社会で生きる力の育成－	Ⅰコミュニケーション能力育成プログラムの改善・充実は継続する。 重点①　授業力向上の取り組み 評価：学校教育診断の「授業の進め方に工夫が見られ，分かり易く充実した授業である」の項目のプラス評価の割合が，90%以上（生徒） 重点②　様々な体験活動を含む指導体制の見直し 評価１：３年間を見据えた総合的な学習の時間の計画が完成している 評価２：キャリアノートの様式が完成している Ⅱ上記重点実現に向けての教育環境づくり（掲示教育・学習環境・生活環境） 「美しい場所で　美しく歩き　美しく話す」を，キーワードとして， 分掌・学年・個人が，具体的な目標を定めて，実践する。	・OJTチーム研修をはじめとして，授業参観や研究授業を実施し，授業力向上に取り組んでいる。 ・キャリア教育の全体計画の見直しや総合的な学習の時間の内容の再構築を行い，指導案や参考資料を含めたキャリアノートの作成に取り組んでいる。 ・ハザードマップを最新のものにするなど掲示物の見直しを行った。また，プロジェクター・スクリーン等ICTを2学年の普通教室にも設置するなど，学習環境の整備・改善に努めている。	・OJT研修をはじめとして，授業参観や研究授業を実施し，授業力向上に取り組んだ。普通教室にICTも整備され，それを活用した授業も多く見受けられた。学校教育診断アンケートの結果は，昨年度並みの78%にとどまった。来年度以降も継続して取り組む必要がある。 ・キャリア・ノートの作成にあたり，総合的な学習の時間の他に，主な学校行事やホームルーム活動の時間についても，そのねらいや身に付く力について分析・整理を行った。 ・キャリア・ノートについては，キャリア教育の手引きと併せて，年度末に完成見込みである。しかしながら，内容面の吟味は不十分であり，活用方法などの教職員への周知徹底と併せて，今後の課題である。	A　当初の見込みを超える取組を行うことができ，目標を上回る達成状況である。 B　当初の見込みどおりの取組を行うことができ，ほぼ目標どおりの達成状況である。 C　当初の見込みの取組を行うことができず，目標を下回る達成状況である。

評価基準

該当する経営目標の番号	課・学科・学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中間期 達成状況	中間期 個別評価	中間期 総合評価	年度末 達成状況	年度末 個別評価	年度末 総合評価	年度末 結果の分析	年度末 改善のための方策	学校関係者評価 評価の妥当性	学校関係者評価 改善方策の適切さ
Ⅰ①	学力向上委員会	授業力の向上と言語活動の充実	・校内外の公開授業・研究授業の参観や研究授業を通して，課題を共有し，授業改善を図る。	・学校教育診断の「授業の進め方に工夫が見られ，分かり易く充実した授業である」の項目のプラス評価が，９０%以上である。（生徒）	・OJTチーム研修において，課題の共有・授業研究等を行い，８教科２０名が研究授業を行った。また，授業公開日に約６０名の参加を得て，公開授業を行った。	B	B	・ＯＪＴ校内チーム研修（全体研修）を年間４回行うとともに，チーム別研修を行い，授業研究を行うことができた。 ・各チームの取組は充実した内容で，新たな指導法などが数多く試みられた。 ・チーム内外にかかわらず，多くの教員からのアドバイスをもらうことができた。	B	B	・達成基準としている学校教育診断の「授業の進め方に工夫が見られ，分かり易く充実した授業である」の項目のプラス評価は７８%程度であり，９０%以上を達成することはできなかった。 ・教員の学習に関わる質問では前年度よりプラス評価の項目も多く，意欲的な授業実践が多く見られたことから，こうした取組を継続することで生徒の学力向上に結びつけることができると考えられる。	・ＯＪＴ校内チーム研修が，より効果的に行われるよう，工夫する。 ・１年については，中学校から高校へと学習内容や方法が切り替わる学年であることから，特に導入的な工夫が必要と考えられる。 ・学校全体で共有できる，授業実践のポイントについて検討する。	妥当である。	分かりやすい授業が学力向上の授業となるように望む。
	教務課	学習意欲を高め，学力向上につながる授業改善に努める。	・ＩＣＴ機器を活用した授業や施設の見学や研修，実践を行う。 ・各教科で研究授業を行う。	・ＩＣＴ機器の環境整備。ＩＣＴ機器を活用した授業の実践事例５教科以上。 ・研究授業を行った教科５教科以上。	・ICT機器を活用した授業は５教科１４科目で行われ，主に教材提示装置と普通教室プロジェクターの使用が見られる。 ・研究授業については，OJTチーム研修や，授業公開日を中心に実施し，８教科１８科目で行われている。	B B	B	・ICT機器の活用については，ほぼ目標通りの数字となった。 ・研究授業では，当初の目標は例年を考えるとこのくらいという目標であったが，OJTチーム研修などの取り組みもあり，多くの教科・科目で実施できた。目標を上回ることとなった。	B B	B	・ICT機器については目標通りではあったが，HR教室にプロジェクターが設置されたという昨年まではとは異なる環境であったことを考えるともっと目標を高くした方が良いかもしれない。 ・研究授業は教科を中心とした取り組みをもっと充実できればさらに授業改善につながる。	・ICT機器の活用のメリットは教科によって異なるため，使用頻度の低い教科もある。そのため簡単に使えて授業にメリハリがつくくらいの効果でも良い。 ・研究授業となると，指導案作成など労力が大きいが，授業見学など，気軽にできて各自が授業に新たな視点が持てるようなことを考える。	妥当である。	授業見学等が特段の制度としてではなく，日常的に行われるようになるとよい。
	商業科	学力向上を目的とした授業改善を図りながら，授業内容の課題を文書化し共有する。	・公開授業を通して，授業見学を積極的に行う。 ・学期や定期考査ごとに振り返りながら，課題を明らかにする。	・授業内容の課題を共有できるような各科目指導計画書を作成する。	・授業公開を活用し，お互いの授業の参観と授業指導力UPにつながる商業の研修会に参加。授業の進捗状況は，常に商業科教員間で話をし，共有。計画書の作成は未完成である。	B	B	・年間を通じて，商業に関する校外研修会に多くの先生が参加，研修し，商業科内で情報を共有し授業改善につながった。知の継承をすべての各科目指導計画書には，まだ落とし込めていない。	B	B	・商業科目は様々な分野があり，校外研修会の資料や成果をファイリングする見える化はできた。	・各学年においての，主要科目の指導計画書を共同で作成することで，作成を通じて，振り返りと知の継承ができると考える。	妥当である。	適切である。
	普通科	学力向上を目的とした授業改善と，学習意欲の向上につながるキャリア教育の推進を行う。	・授業公開を積極的に行い，「見る」「見られる」ことを通して相互の授業力を高める。 ・生徒のやる気につながる情報を提供し，自ら学ぶ姿勢をつけさせる。	・学年ごとに目標をもって努力する。達成基準は各学年の決定とする。	・授業公開のときに相互の授業参観が行われ，授業力の向上につながっていくと考えている。	B	B	・各教科や担任の先生方による，生徒の学力向上のための取り組みが行われ，生徒の意欲向上にもつながっていたと考えている。	B	B	・生徒の学力向上のためには生徒個々の状況把握が不可欠であるが，その段階まではできていないのではないか。	・授業時間以外で生徒とコミュニケーションがとれる時間をとり，面談や個別補習などを行う。	妥当である。	適切である。
	国際情報科	授業でのＩＣＴ活用と言語活動を中心にしたアクティブラーニング（考える授業）を推進し，コミュニケーション能力を向上させる。	・傾聴力，発信力，実行力を強化するため，グループワークやプレゼンテーションを多く取り入れた授業を行う。 ・日常生活においてもコミュニケーションスキルを用いて良好な友好関係を築くことを実践させる。 ・実用英語検定，ＴＯＥＩＣ，ＧＴＥＣ等への取り組みを促す。	・ｉＰａｄを有効に活用し，リサーチや共同学習を行うことができる。 ・生徒がプレゼンテーションソフトを使いこなし，効果的なプレゼンテーションができるようになる。 ・英検の合格者が増加し，ＴＯＥＩＣ等の平均点がアップする。	・岡山大学留学生との交流会の準備にあたり，１年生ではグループごとにｉＰａｄや図書館を利用して留学生の出身国調べや，自分たちが紹介する日本文化の英語表現調べをした。２年生では８グループに分かれて，日本文化紹介のプレゼンテーションを作成，発表した。また，カナダ及び東ティモールからの学生との交流会で，日本と西大寺高校のプレゼンテーションを作成，発表した。 ・昨年度と比較してＧＴＥＣのトータルスコア平均が前年に比べて１７%上昇しており，前年度生と比較しても１４%上回っている。また英検においても２級合格者が現時点で昨年比２年生は２倍，１年生は１．５倍になっている。	B B A	B	・イングリッシュキャンプでのディベートへ向けて，インターネットを使って立論や証拠資料，反駁材料をリサーチし，グループで協力して議論を戦わせた。当日はＡＬＴによるジャッジ，講評をもらいさらに技術を向上させた。 ・プレゼンテーションソフトを用いて，海外短期研修での現地校で行う学校紹介を作成した。	B B A	B	・国際情報科独自の授業と行事を活用し，様々な活動ができている。今後も継続していくべきである。スマートフォンの普及により，ＩＣＴ機器はますます生徒にとって身近な存在になっており，使い方等の説明を省略して指導に入ることができる。 ・プレゼンテーションの内容や発表は回数を重ねることで向上した。 ・英語の自己表現活動がＧＴＥＣや英検でのライティングの得点へつなげていくことがきる。	・誰が担当になっても指導がスムーズに行えるよう，テキストや指導法のマニュアル化とこれまでの実績のデータ化を進める。 ・発表や自己表現の機会を増やし，異文化交流を積極的に行う。 ・英検の受験者を増やし，４技能をバランスよく伸ばす指導を行う。特にライティングに力を入れることが必要である。	妥当である。	適切である。
	第3学年	進路実現に直結する「確かな学力」が生徒の身につくよう，授業力の向上に取り組む。	・学習習慣を高め，基礎学力の向上を図る。 ・学習のめあてを明確にし，授業に取り組む意欲を高める。 ・段階的な目標を明確にし，生徒が最終目標に向かって最後まで努力し続けるようにサポートする。	・学校教育診断アンケートの「授業の進め方等に工夫が見られ，分かり易く充実した授業である（生徒）。」の項目のプラス評価の割合が，昨年度(76.2%)より増える。目標90%以上 ・生徒が主体的に学習に取り組み，学力が向上している。	・個々に授業改善や重点目標の設定を行って，授業力の向上に取り組んでいるが，学年としての具体の目標が明確に示されていない。 ・進路実現に向けて，個々の生徒に応じた様々な取り組みを行っている。	―	B	・学校教育診断アンケートの該当項目の項目のプラス評価の割合が，81.4%となり昨年度を上回ったが，目標90%以上を達成することはできなかった。 ・各教科や担任の教員が授業をはじめ，補習や個別の指導を通じて，個々の生徒に応じた学力向上への取り組みを行った。 ・生徒は進路や受験方法に応じて，主体的に学習に取り組んでいたが，進路決定者の学習に対する姿勢は残念な状況になってしまった。	B B	B	・生徒にとって「分かりやすい充実した授業」にするためには，点数や進路実現など生徒が実感できる形で現れなければならないが，十分な結果が得られていない。 ・主体的な学習への取り組みに関しては生徒間に温度差が生じてしまった。	・効率的な取り組みをするためには，学年，学校としての共通目標を具体的に明示していく必要がある。 ・学力や授業の基礎となる部分は，教科に関係なく徹底していくことは可能であるので，熟議していくべきであろう。	妥当である。	適切である。

該当する経営目標の番号	課・学科・学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中間期			年度末						学校関係者評価	
					達成状況	個別評価	総合評価	達成状況	個別評価	総合評価	結果の分析	改善のための方策	評価の妥当性	改善方策の適切さ
Ⅰ②	キャリア教育委員会	キャリア教育の全体計画の見直しを行う。	・総合的な学習の時間やホームルーム活動の時間についての指導案等資料の整理を行い，実施内容等を再検討する。 ・スタートプログラムや1日研修についての再検討を行う。	・総合的な学習の時間とホームルーム活動について，次年度以降の計画が年度内に完成している。 ・総合的な学習の時間の3年計画が確立している。 ・キャリアノートの様式が完成している。	・キャリア教育委員会を開催したり，総合的な学習の時間の運営担当者から意見を聴取したりし，内容の見直しを進めている。 ・次年度以降の計画は，キャリアノートの作成と並行して進めている。	B B B	B	・キャリア教育の全体計画を７つの力を反映させた形で完成させた。また，主な学校行事についても，ねらいや身に付く力を分析・整理することができた。 ・総合的な学習の時間とホームルーム活動の時間の次年度の計画については，年度内に完成する見込みである。 ・総合的な学習の時間の３年計画やキャリアノートについては，議論が不十分であり，継続して研究していく必要がある。	B B B	B	・学校行事等のねらいや身に付く力からの分析・整理を行ったことはカリキュラム・マネジメントの側面もあり有効であった。 ・キャリア・ノート作成の取りかかりが遅く，十分に検討できていない点があり，来年度以降も引き続いて検討する必要がある。 ・次年度の計画が年度末の完成となりがちである。	・来年度の新たな取り組みであるスタートプログラムⅡの事後検証を行う。 ・特別活動の全体計画を作成する。 ・委員会としての年間活動計画を早期に作成し，次年度の計画立案やキャリア・ノートの改善等を計画的に進める。 ・ホームルーム活動の時間の内容検討や指導案の整備を進める。 ・ホームルーム活動の時間も含めて，実施内容・時期の固定化を図る。	妥当である。	適切である。
	総務課	コミュニケーション能力育成プログラムの改善・充実を図る。	・各プログラムの内容の適否を検証し，必要であれば改善する。また，新たなプログラムの導入についても検討・試行する。	・コミュニケーション能力育成プログラムの実践により，生徒のコミュニケーション能力が向上し，グループ学習等がスムーズに行える環境が整っている。	・１・２学期で，講演会及び全７時間のプログラムを実施し，コミュニケーション能力の育成を進めている。プログラムの成果の検証，新たなプログラムの検討は今後行う予定である。	B	B	・プログラム実施前後の生徒対象のアンケート結果から，プログラムの実施をとおして，生徒のコミュニケーション能力，特に「傾聴力」「柔軟性」等，が向上したと判断できる。生徒間の人間関係作りにも役立っており，スムーズにグループワーク等に取り組める環境ができている。	B	B	・第１学年と連携を取りながら，講演会やプログラムの実施計画を作成し，効果的に実施ができた。学年内での事前研修等も適時行われていた。新しいプログラムの導入については，次年度の時間的な制約もありしないことに決めた。	・キャリア教育委員会と連携を取りながら，２年生・３年生での活動でもコミュニケーション能力を育成・発揮できる場面を多く設定する必要がある。 ・事前研修の充実が，今後のプログラム継続には重要になってくる。	妥当である。	２年生・３年生における活動の定着を重視して欲しい。
	進路指導課	進路実現のために必要な力（学力・コミュニケーション力）を身に付けさせる。	・適切な進路情報の提供と生徒個人に応じたきめ細やかな進路指導（学習指導・面接指導・進路相談など）の実施により，全ての生徒の志望進路実現に向けて最善を尽くす。学年団教員全員で生徒をサポートする。 ・さらなる学力の向上をめざし，卒業まであきらめず学習に取り組ませる指導を行う。	・就職希望者が全員内定を得ている。浪人や特別な事情のある生徒を除き，卒業時の進路未決定者がゼロである。 ・進路決定後も学習意欲を失わず頑張る生徒が増加している。（２学期・３学期の欠席者が前年度よりも減少している。）	・就職希望者の内定人数は，14人中の14人で100%である。（11月末現在） ・センター試験出願人数は，209人（昨年214人）であり，卒業まで勉強を頑張り続けようと声をかけてきた成果が，昨年今年と出てきているように思われる。	A －	B	・就職希望者が増加した中で，年度当初は苦戦が予想されたが，何とか二次応募までには内定を勝ち取ることができた。 ・国公立大出願者（前期・中期・後期）は，昨年度と比べて増加しており，最後まで頑張ろうとする生徒も多い反面，クラスや科によっては２学期以降学習意欲が低下し，欠席者が増加した。	A B	B	・岡山県東南部の事業所を希望する生徒が多く，校内及び他校生と競合しがちである。就職希望者が増えると難しくなる。 ・卒業まで頑張り続けようと声をかけてきた結果がある程度表れている。一方で，進路を早期に決定した生徒に対する細かな指導が徹底できなかった。	・早期から就職に向けての心構えや準備，対策を行わせる。県内事業所の開拓も必要。 ・各クラス担任との連携，学年・進路指導課としての統一した指導を強化していく。	妥当である。	最後まで充実した高校生活が送れるよう具体的アイデアが必要である。
	進路指導課	新入試制度の研究と対応を進める。	・進路指導課のメンバーを中心に新テストへの対応について研究と準備を進める。	・全教職員で情報と課題の共有ができている。	・各種研究会で報告された内容・情報については，課や学年で回覧し，情報の共有はできている。具体的な対策や指導カリキュラムの見直しについてはまだである。	B	B	・高大接続について各種研究会で得た情報は，課会や検討会で報告したが，具体的な対策はまだとられていない。	B	B	・新テストの具体的な実施方法が，最終的に決定されるまでは，対策がとりにくい。	・平成30年度入学生への指導がスムーズにできるように，来年度１年間かけて，カリキュラムの検証を行う。	妥当である。	適切である。
	図書課	課題解決のために生徒が自発的に図書館の図書を借りる（アクティブ・ラーニング）。	・図書委員会による啓蒙活動（読書リレー等） ・図書館だより(ライブラリー・ナビ)の発行 ・部活動や課題研究の観点からの選書	・年間貸出冊数5000冊以上（現３年・２年はそれぞれ昨年度1500冊程度） ・年間15号以上（昨年度12号　今年は課長も参加） ・部活動や課題研究関連図書の充実	・読書リレーは当初予定と変更して実施。不読者数減の効果有。冊数合計は伸びていない。 ・ライブラリーナビは現在１０号まで。 ・県立図書館からの譲渡や渡辺教育基金による支援で蔵書の充実が図れた。	B B A	B	・読書リレーは図書委員会単独で実施。１年，２年のみであったが不読者数減に効果あり。１月末時点で約4800冊。年度末には達成見込である。 ・ライブラリーナビは現在15号。目標達成。 ・部活動・各教科からの蔵書充実が図れた。	B B A	B	・読書マニアとも言える生徒の減少への対策を模索している段階不読者数を減らすという方向は間違っていないが，LHR・教科等教員の働きかけがもっと必要。	・読書に対する教員自身の認識の向上がまず必要。理系・文系問わず読書＝系統的な知識・理解の入口という認識を創りたい。ビブリオバトルの復活。	妥当である。	適切である。
	第3学年	適切な進路指導が行えるよう，互いに協力し意欲的に取り組める雰囲気をつくる。	・学科，学年団，進路指導課で協力し，進路実現に取り組む。 ・面談や総合的な学習の時間を活用し，生徒と向き合う時間を増やしていく。 ・不安や悩みを抱える生徒たちのサポートができるようにする。 ・タイムリーに情報を提供し，現状が目に見える形にする。	・学校教育診断アンケートの「入学してよかった（生徒）。」の項目の評価が，昨年度(76)より高くなる。目標評価80以上。 ・進路について，生徒，保護者が満足（納得）でき，全員が卒業する。	・クラスを越えて情報の共有が図れたり，協力する態勢を意識的につくれたりしている。 ・面談や進路指導などを通して，生徒との関わりが深まっており，手厚いサポートができている。 ・授業中の困った状況などを自由に話し合える雰囲気があまりなかったが，少しは改善されてきている。	－ －	B	・学校教育診断アンケートの該当項目の項目の評価は81.1となり，目標を達成することができた。（保護者も約98%がプラスの評価） ・担任をはじめ，関係の先生方のご尽力により，不認定科目を１つも出すことなく全員が卒業認定していただけた。 ・進路については，担任，進路指導課をはじめ多くの教員で関わって，生徒個々に合った指導を進めることができた。	A A	A	・生徒のやりたいことを最後まで見守り，必要に応じて手を差し伸べていくことができた。 ・クラスごとに色を出して雰囲気づくりを行うとともに，きめ細かく生徒個々をサポートできた。	・武器となるような特徴を持たせることも，進路実現には必要（様々な受験方法に対応するためには，早い時期からの取り組みが不可欠）。 ・個々の生徒に対する共通認識を深めるために，担任が進路指導室へもっと足を踏み入れていける工夫が必要。	妥当である。	適切である。
	第2学年	コミュニケーション能力開発の必要性について理解し，総合的な学習の時間で身に付けたコミュニケーション能力を進路実現に向け様々な体験活動を通じて活用することができるようにする。	・総合的な学習の時間において，将来必要となる傾聴力を中心とした７つの力を理解し，身に付けさせ，進路学習や生徒会行事，社会貢献活動を通じて，７つの力を活用する場面を設定する。	・「７つの力の必要性について理解できた」生徒が100%，「様々な体験活動を通じて活用できた」生徒が70%以上。 ・本校での３年間の能力開発と活用にこだわった総合的な学習の時間を計画，実践し，2年次のモデルを作成する。 ・「コミュニケーション能力の育成や活用する場面を設定した授業を行った」教員が100%，また学校教育診断の「授業の進め方等に工夫が見られ，分かり易く充実した授業である」の項目のプラス評価の割合を昨年度より上昇させる（生徒）	・ＪＳＪでの調べ学習や発表，社会貢献活動などを通して，「７つの力の必要性」については理解してきている。ただ，活用についてはまだ不十分な生徒が見られることから継続指導が必要であると考える。 ・修学旅行や進路志望について調べたことを発表するプレゼンテーションや書く力を身につけるための小論文学習などを行うことで，３年間を通した能力開発と活用を目的とした総合的な学習の時間の計画・実践については適切に行われている。 ・「コミュニケーション能力の育成や活用する場面を設定した授業」についてはアクティブラーニングの観点からも様々な工夫が授業で行われている。また，各教室に設置されたＩＣＴ機器を活用し，分かり易く充実した授業に取り組んでいる教員が多く見られた。	B B A	B	・「７つの力の必要性」についてはＪＳＪの活動を通して，９割の生徒が理解できていると考えられる。「様々な活動を通じて活用できた」生徒は課題研究や弁論大会や小論文を通して70%以上と判断できる。 ・3年間の能力開発と活用にこだわった総合的な学習の時間の計画，実践ができた。 ・「コミュニケーション能力の育成や活用する場面を設定した授業」については様々な工夫が授業で行われている。また，各教室に設置されたＩＣＴ機器を活用し，分かり易く充実した授業が増えている。	B B B	B	・「7つの力の必要性」についての生徒の理解はできてきているが，100%には足りない。「様々な活動を通じて活用」できる力は付いている。 ・３年間を見通した能力開発と活用を見据えて２年次のモデル作成はできたと考えられる。 ・「コミュニケーション能力の育成や活用する場面を設定した授業」は行えているが，評価にはまだまだ反映が足りない。	・３年次の総合的な学習の時間を通して「7つの力の必要性について」の理解を深めるよう，内容を工夫する。 ・２年次までに付けてきた力をさらに伸ばせるよう計画し，実践し，３年間のモデルとなるようにする。 ・「コミュニケーション能力育成」を念頭に置いた授業を展開するよう学年で努力する。	妥当である。	教科指導と並んで，総合的な学習の時間のさらなる内容の充実は重要であり，独自性の発揮できるところであり，期待している。
	第1学年	コミュニケーション能力の育成を図る。	・コミュニケーションの第一歩として自ら進んであいさつするよう働きかける。 ・教員側からも廊下ですれ違うときなどに率先して声を掛ける。 ・聴き方のスキルＦＥＬＯＲを良く理解させ，折に触れて実践を促す。	・生徒が自分から進んであいさつができる。 ・教員からのあいさつに対してほぼ全員があいさつを返す。 ・（アンケートの結果）コミュ力がアップしたと感じる生徒が増える。	・教員からの挨拶に対して反応しない生徒は皆無だが，生徒の側からの自発的な挨拶についてはまだ十分とは言えない。 ・コミュ力全般については終了後のアンケートによって評価する。	B A －	B	・気持ちいい挨拶ができる生徒が多いが，自発的な部分は大きな変化無し。 ・事後アンケートの結果は，よく伸びたところもあれば，あまり伸びの見られなかった部分もある。	B A B	B	・傾聴力，相手の気持ちを理解する力等は，コミュニケーションプログラムによって大きく伸びた。半面，自他肯定力，実行力が課題である。	・生徒たちの特性をよく理解した上で，彼らに何が必要なのかを考えていかなければならない。	妥当である。	適切である。

課・学科・学年等	課・学科・学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中間期			年度末						学校関係者評価	
					達成状況	個別評価	総合評価	達成状況	個別評価	総合評価	結果の分析	改善のための方策	評価の妥当性	改善方策の適切さ
Ⅱ	生徒課	学校内外での諸活動を通じて，生徒が豊かな人間性や社会人として必要な資質を身につけるための援助を行う。	・社会的自立に向けてＴＰＯを意識した適切な態度を身につけさせる。 ・生徒会活動などの特別活動や部活動を充実させ，心身の健全な成長を促す。 ・社会貢献活動を通じて協力する力・自他肯定力・実行力などの向上を図る。	・積極的に挨拶をすることができる。 ・制服の着こなしや言葉遣いなどを情況に応じて正しく選択することができる。 ・特別活動や課外活動に能動的に参加している。	・数年前に比較して積極的に挨拶できる生徒は増えた。挨拶されても返せない生徒は少なくなった。 ・女子のスカートの丈が短い生徒は少なからずいる。ＴＰＯを弁えるための姿見の活用も十分ではない。 ・社会貢献活動には多くの生徒が積極的に参加している。	B B− A	B	・数年前に比較して積極的に挨拶できる生徒は増えた。挨拶されても返せない生徒は少なくなった。 ・女子のスカートの丈が短い生徒は少なからずいる。ＴＰＯを弁えるための姿見の活用については，更なる積極的な働きかけが必要である。 ・社会貢献活動には多くの生徒が積極的に参加している。生徒の目標ポイントの達成率は98%を越えた。地元開催のインターハイでは総合開会式や競技の運営に多く生徒が積極的に参加し，大会の成功に貢献した。生徒会執行部は県下で高校は数校しか参加していないスマホサミットに参加し，その成果を全校生徒にフィードバックすることに努めた。	B B A	B	・挨拶や身嗜みについては，教員の共通認識のもと，一貫した指導が必要であるが，担当部署としての働きかけが十分ではなかった。 ・社会貢献活動は運営体制を変更しながらも，例年並みの取り組みを維持できた。課外活動・特別活動については教員の労力を惜しまぬ指導に，生徒が真摯に応えていた。	・挨拶や身嗜みについては，粘り強く全教職員で指導し続けるしかない。 ・来年度は制服の仕様書を入札に向けて確定する年度であるが，その際に改善につながるような工夫をする。 ・社会貢献活動は，生徒の活動水準を維持しながら，活動の管理からの脱却を模索する必要がある。 ・課外活動・特別活動の指導の負担が特定の教員に偏らないようにする必要がある。	妥当である。	社会貢献活動の内容面での一層の充実を期待している。
	厚生課	校内の美化を推進して教育環境の向上を図る。	・教室・トイレを重点的に清掃する。	・教室・トイレがきれいになることで教育環境が向上する。	・教室は担任の協力で概ね良好である。ただし，ロッカーの上に荷物を置く生徒がいるようだ。トイレは，全体的に良いと思うが，小便器の周りや大便器のドアを拭いたらよくなると考える。	B	B	・教室の清掃状況は，おおむね概ね良好であった。ロッカーの上の荷物は相変わらず置く生徒がいたようだ。トイレは，全体的に良いと思うが，一部のトイレの清掃状況に問題があったが，解消されている。	B	B	・清掃は教室を中心に概ね行われていた。校内にごみの散乱は特にみられなかった。トイレは清掃が徹底されていないところがあったが，清掃されていた。	・毎日のことであり，きちんと清掃を行っていく。汚れたところがあればすぐに清掃を行う。公共施設であり汚さない環境意識を育成する。	妥当である。	適切である。
	厚生課	悩みを持つ生徒に対して，安心して相談できる環境をつくる。	・安心して相談できる環境をつくる。 ・長期欠席者・不登校生徒に適切に対応する。	・悩みを持つ生徒に適切に対応することで長期欠席者，不登校生徒の増加を防ぐ。	・思春期相談を中心に悩みを持つ生徒・保護者に対応している。３０日以上の欠席者が，１年生０名，２年生４名（内１名は転学），３年生２名である。	B	B	・思春期相談は生徒・保護者の利用があった。３０日以上の欠席者が，１年生１名，２年生６名，３年生９名である。	B	B	・長期欠席者は，例年並みであり，出現率は低い状態を維持している。	・スクールカウンセラーによる思春期相談の維持継続。	妥当である。	適切である。
	図書課	図書館内の視聴覚設備を充実する。	・ディスプレイを設置する。 ・図書館ソフトを更新する。	・入り口左側のガラス張りスペースにディスプレイを設置し，定期的に図書委員が情報発信する体制を構築する。 ・検索ソフトの更新。	・ディスプレイの設置ができて無事２学期から稼働中。おすすめ図書や館内利用の方法など情報発信に努めている。内容は図書委員にも相談。	B —	B	・ディスプレイの設置は２学期から。３学期には検索ソフトの更新もできた。生徒主体の運用にまでは至らずも初年度としては評価できる。	A A	A	・ディスプレイ・検索ソフトの両方を充実できた。今後は活用方法に重点が移る。	・例えば，ビブリオバトルの映像を流す，各教科で積極的に課題設定してもらう等	妥当である。	適切である。
	第2学年	身嗜みなど西高生にふさわしい態度について理解し，「美しく歩く」ことのできる生徒を育成する。	・日常的な生徒・教員間のコミュニケーションを重視し，問題がある場合に積極的に働きかける。	・年間の特別指導を５件以下に留め，学年集会における身嗜みチェック（服装・頭髪検査）で特別な指導を要する生徒を毎回５名以下にする。	・現在特別指導は１件である。また，学年集会における身嗜みチェック（服装・頭髪検査）で特別な指導を要する生徒も各回５名以下である。	A	A	・年間の特別指導は目標値以下である。また，学年集会における身嗜みチェック（服装・頭髪検査）で特別な指導を要する生徒も各回５名以下である。	A	A	・今のところ指導体制は整っていると考えられる。	・今の状況を継続的に指導する。	妥当である。	適切である。
	第1学年	社会や学校のルールに則って行動できる力を養う。	・人と接するときのマナーを教える（特に職員室入室時のマナーを徹底する）。 ・制服を正しく着こなすよう指導するとともに，素直に「はい」と言える生徒を育てる。 ・授業開始時に授業の準備が整っているよう指導する。	・職員室内で適切な行動ができた者が８０%以上。 ・服装頭髪検査で指導を要する者が少ない。 ・授業開始時の着席状況１００%。	・多くの生徒は名前や用件を言って入ってくるし，言葉遣いも概ねよい。 ・身だしなみチェックで指導される人数は多くはないが，スカート丈が短い生徒が増えた。 ・クラスによって差があるが，チャイムが鳴ってから準備する生徒も散見される。	B B B	B	・職員室入室時のマナーは８０%以上の生徒がきちんとできていると評価できる。 ・身だしなみチェックで指導される生徒は少ないが，スカート丈，ソックス等で指導を要する生徒は増えている。 ・授業開始時の着席状況は一学期よりも低下。	A B B	B	・学校生活に慣れるにしたがって意識が低下してしまった部分が見受けられる。	・緊張感を維持し続けることは無理でも一学期にできていたことはできるはずなので，粘り強く働きかける。教員も授業開始時に必ず教室にいるよう努める。	妥当である。	適切である。